国　　語

1　学習指導と評価における課題

(1)「北海道高等学校学力向上推進事業」学力テストの概要

ア　学力テスト（Ｃモデル国語・Ｂモデル国語・Ａモデル国語）の目的

全ての生徒に対し、社会的、職業的自立に最低限必要な学力を保証するとともに、能力・進路等に応じた教育を提供するため、対象や目的を明確にした３つのモデルを設定し、各モデルに応じて、生徒の学習内容の定着状況を把握すること。

イ　出題科目

「国語総合」

(2) モデル別分析結果

「結果に基づく成果と課題」の●の項目は十分に身に付いていないと考えられる事柄、○の項目は成果が見られた事柄である。

ア　分析結果

モデル	出題領域	結果に基づく成果と課題	平成26年度との比較
C	話すこと・聞くこと	○　目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりすること。	◎　84.2%の高い正答率。また、無回答率は2.6%と、前年度比1.5ポイント減少した。
	書くこと	○　対象を的確に説明したり描写したりするなど、適切な表現の仕方を考えて書くこと。	◎　グラフから読み取ることのできる事実を書く設問の正答率が、平成26年度8.5%から平成27年度58.9%と大きく上昇した。
	読むこと	●　文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり必要に応じて要約や詳述をしたりすること。 ○　文章の構成を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図を捉えたりすること。	◎　現代文分野の正答率80.9%に対し、古典分野の正答率は33.0%と低く、無回答率も9.4%と他の設問に比べて高い。 **古典分野については、読むことに関する設問だけではなく伝統的な言語文化と国語の特質に関する設問の正答率も低い。Ｂモデルも同傾向。**
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	●　文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。 ●　文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすること。	◎　訓読のきまりに関する設問（平成26年度60.2%）と比較して、文語のきまりに関する設問の正答率が46.4%と低い。 ◎　手紙文の表現に関する設問（平成26年度80.0%）と比較して、係り受けに関する設問の正答率が49.6%と低い。
B	読むこと	●　文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。 ○　文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。 ●　文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。	◎　現代文分野の正答率71.1%と比較して、古典分野の正答率が36.8%と低い。 ◎　平成26年度の正答率38.6%と比較して、平成27年度の正答率は75.2%と高い。 ◎　正答率50.5%と、読むことに関する設問の中で最も正答率が低い。
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	○　常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字が書けるようになること。 ●　文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすること。	◎　選択肢から本文と同じ漢字を含む熟語を選ぶ設問の正答率が、平成26年度87.2%、平成27年度75.0%と高い。 ◎　古文の語句についての設問の正答率が、平成26年度25.7%、平成27年度27.1%と低い。
A	読むこと	●　文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。	◎　文章の内容を間違いなく理解し、文章の中から関連する表現や内容を取り上げて説明することに課題がある。
	書くこと	●　論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。	◎　複数の根拠を踏まえて、自分の考えを論理的にまとめることに課題がある。 **読み取った文章に対する自分の考えを論理的にまとめて書くことに課題がある。**
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	●　常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字が書けるようになること。	◎　文脈に合わせて適切な漢字を書く設問の正答率が39.6%と低い。特に、「不断」（正答率11.9%）、「処遇」（22.2%）、「台頭」（正答率26.9%）の正答率が低い。

(3) 学力テストの結果を踏まえた改善の方向

学力テストの結果から、各領域において課題が明らかとなった。(2)で示したモデル別分析結果や「２　育成すべき資質・能力を踏まえた学習指導・評価の改善・充実」の具体的な取組を参考にするなどして、生徒や学校の実態に即し、指導の改善を図る必要がある。

全般的には、古典を教材とした場合の「読むこと」の「文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること」に課題が見られた。古典における基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、古典を理解しやすくし、親しみやすくするためには、現代語訳などを活用するなどして、古典に対する興味・関心を広げていくよう配慮する必要がある。

また、「書くこと」に関しては、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること」に課題が見られた。自らの考えを相手に納得させ、同意や共感を得る説得力のある文章を書くためには、書き手が自らの思考の進め方を整理し、文章を論理的に組み立てていく必要がある。また、客観性や信頼性の高い資料を用いて、自らの論が成り立つ根拠を示すことが重要である。文章を書き綴る中で、自分の考えをまとめ、更に緻密な確固としたものにしていくことを実感させる取組も大切である。

２　育成すべき資質・能力を踏まえた学習指導・評価の改善・充実

(1) 「古典Ａ」に関する指導の改善・充実

ア　課題の解決に向けた取組

学力テスト（Ｃモデル国語、Ｂモデル国語）の結果からは、古典を教材とした場合の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」、特に、語句の意味や文語のきまりに関する基礎的・基本的な知識や技能を問う問題に課題が見られた。古典における基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせるに当たっては、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある。そのためには、古文と漢文だけでなく、古典に関連する近代以降の文章や、伝統芸能、年中行事など、多様な方面からアプローチすることが大切である。

次ページに示した単元計画は、「古典Ａ」において、伝統的な言語文化についての課題を探究し、理解を深めることに関する指導事項について指導することを想定している。生涯学習を視野に入れて学習する「古典Ａ」では、語句や文法、現代語訳の学習のために過度に時間を取られることで、豊かな古典の世界に楽しく触れる前に、生徒を古典嫌いにしてしまうことのないよう、教材や指導の方法を工夫し、古典の世界に楽しく触れることができる授業を展開し、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成していく必要がある。本単元では、平安時代の衣装の色づかいについて探究することを通して、古人のものの見方、感じ方、考え方を知り、古典の現代的な価値に気付かせることをねらいとしている。

イ　単元における指導と評価の計画の例

1　単元名　伝統的な言語文化について探究し、古典の現代的な価値について理解を深めよう

2　単元の目標

・伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深めようとする。（関心・意欲・態度）

・伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深める。（知識・理解）

3　取り上げる言語活動と教材

(1) 言語活動　季節ごとに分かれた４つのグループが、それぞれ季節のかさね色目の特徴について調べたことをもとに制作したカードを紹介し合う。

(2) 教　　材　教科書、国語便覧、インターネットなど

4　単元の具体的な評価規準

関心・意欲・態度	知識・理解
季節ごとのかさね色目の特徴を探究して、我が国の伝統と文化が自分の人生や生活につながっていることを理解しようとしている。	季節ごとのかさね色目の特徴を探究して、我が国の伝統と文化が自分の人生や生活につながっていることを理解している。

本単元においては、①季節ごとのかさね色目の特徴を探究している状況と、②我が国の伝統と文化が自分の人生や生活につながっていることを理解している状況の、2点を満たしている場合を「おおむね満足できる」状況「B」として設定する。

5　単元の指導計画

次	学　習　活　動	言語活動に関する指導上の留意点
	本単元では、衣装の表裏の配色を示す「かさね色目」について、季節ごとに配色の特徴を調べ、日本人の季節観について理解を深める。	・第３次で、カードを用いたかさね色目の紹介を行うことについて、見通しを持たせる。 はじめにゴールの姿を示すことで、見通しを持って学習活動に取り組む意識を持たせます。
第１次	・古典作品の中に出てくる衣装の色の表現に着目し、かさね色目について理解する。	・複数の古典作品を提示し、かさね色目の表現を指摘させる。
第２次	・クラス全体を季節ごとに４つのグループ（以下「季節ごとのグループ」）に分け、それぞれの季節のかさね色目の配色の傾向や色合わせの名称の由来等を調べ、日本人の季節観について考察させる。 ・それぞれの季節のかさね色目の特徴について紹介するために、かさね色目を再現したカードを制作する。	・なぜその色の組合せなのかという観点から、日本人の季節観を考察させる。 自分の考えをまとめる個人学習 → 考えを共有するグループ学習 → 再度考えをまとめる個人学習 他者との対話を通じて、考えを広げ深める学習過程を保証します。
第３次	・グループを、季節ごとのグループのメンバーが全て含まれるグループ（以下「四季のグループ」）に再構成し、それぞれの四季のグループ内でカードに再現したかさね色目を紹介し合う。	・四季のグループは、４つの季節ごとのグループのメンバーが全て含まれる構成とする。
第４次	・グループでの学習を踏まえて、色の調和と日本人の季節観について意見文を書く。 これまでの学習活動を振り返ることを通じて、我が国の伝統と文化が自分の人生や生活につながっていることに気付かせます。	・現代の季節ごとの色彩イメージと比較しながら、学習を振り返り日本人の季節観についてまとめさせる。

(2) 「国語総合」における「書くこと」に関する指導の改善・充実

ア　単元における指導と評価の計画の例

1　単元名　自分の考えを効果的に表現しよう

2　単元の目標

・論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめようとする。
（関心・意欲・態度）

・論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめることができる。（書く能力）

・文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにする。
（知識・理解）

3　取り上げる言語活動と教材

(1) 言語活動　公募の小論文コンクールへの応募作品を書くための一連の活動

(2) 教　　材　自分が書きたいことに関する書籍（図書館の蔵書）・統計資料等

4　単元の具体的な評価規準

関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
確実な根拠に基づき、論理の構成や展開を工夫して、前後矛盾することなく自分の考えを論理的に展開している文章を書こうとしている。	確実な根拠に基づき、論理の構成や展開を工夫して、前後矛盾することなく自分の考えを論理的に展開している文章を書いている。	書くことに必要な文章の組み立て、語句の意味・用法及び表記の仕方について理解している。

本単元においては、「書く能力」の育成を目指し、学校図書館を効果的に活用するとともに、「書くこと」の言語活動を指導計画に位置付け、４次にわたる指導を展開している。
（関連する学習指導要領の指導事項　「国語総合」内容「B　書くこと」(1)のイ）

5　単元の指導計画

次	学　習　活　動	言語活動に関する指導上の注意点
	本単元では、公募の小論文コンクールに入賞することを目指し、確実な根拠をもとに自分の考えを文章にまとめ、相互評価を行うことを通して、自分の考えや文章表現について振り返り、自分の書いた文章を推敲して小論文を完成させる。	・自分の考えをまとめた文章を書き、最終的には公募の小論文コンクールに入賞するという目標を示す。
第１次	・公募の小論文コンクールの入賞作品について、様々な観点から分析する。	・文章の構造や根拠と意見の関係等について分析する。
第２次	・自分が書きたいことに関係する本や資料を見つけて読み比べ、アウトラインをつくる。	・複数の本や資料を読み比べ、書こうとするテーマについての理解を深めさせる。
第３次	・第１次の分析の結果を活用して、自らが考えたテーマについて、小論文を記述する。	・分析の結果を、必ず文章に反映させる。
第４次	・４～５人のグループで相互評価し（小論文の回覧）、他者の小論文について、「良いと思う点」と「改善に向けたアドバイス」を、二色の付箋に書き分けて指摘する。（集まった付箋を分類するなどして、傾向を明確化する。） ・相互評価を生かして小論文を推敲する。 ・推敲した小論文について自己評価し、公募の小論文コンクールに応募する。	・遠慮なく指摘できるように、付箋には無記名で指摘事項を記入させる。 ・推敲及び自己評価を通して、自分の書いた小論文に、学んだことが生かされているかどうか振り返らせる。

生徒が見通しを持って取り組むことができるように、目標を示します。

先哲の考え方を手掛かりに考え、自らの考えを広げ深めさせます。

自己の学習活動を振り返らせ、今後の学習につなげるようにさせます。

イ　課題の解決に向けた取組

学力テスト（Aモデル国語）の結果から、「書くこと」に関して、文章から読み取ったことについて、自分の考えを論理的にまとめて書く問題の正答率に課題が見られたことから、「書くこと」の指導においては、前ページに示した具体的な取組を参考にするなどして、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること」について、重点的に指導する必要がある。

前ページに示した単元計画では、生徒が見通しを持って学び、自己の学習活動を振り返って次につなげたり、先哲の考え方を手掛かりに考えることを通じ、自らの考えを広げ深めたりすることができるよう、次のような学習活動を展開することとした。

○　第１次において、公募の小論文コンクールの入賞作品における文章の構造や、根拠と意見の関係等を分析することを通して、自分の考えを効果的に表現するための文章の在り方について理解を深めさせる。

○　第２、３次において、本や資料を読み比べて参考にするとともに、第１次で分析したことを活用し、小論文を記述させる。

○　第４次において、相互評価を生かして小論文を推敲するとともに、推敲した小論文を自己評価させる。

評価については、公募の小論文コンクールに応募する原稿を作成させ、その記述の内容を「書く能力」として評価したり、生徒が相互評価を生かして自分の文章を改善しようとしているかを「関心・意欲・態度」として評価したりすることが考えられる。

３　「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」について

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会は、平成28年８月に公表した「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（以下、「審議のまとめ」という。）において、子どもたちの現状と課題を踏まえつつ、人間が学ぶことの本質的な意義や強みを改めて捉え直し、一人一人の学びを後押しできるよう、これまでの改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しにとどまらず、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるか」までを見据えて学習指導要領を改善することを発表した。

特に、子どもたちが「どのように学ぶか」に着目して、学びの質を高めていくためには、「学び」の本質として重要となる「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した「アクティブ・ラーニング」の視点から、授業改善の取組を活性化していく必要があることが示された。

(1) 現行の高等学校学習指導要領の課題

「審議のまとめ」においては、高等学校の国語教育の課題として、次の事柄が指摘されている。

・教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分に行われていないこと

・話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと

・古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会

や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、生徒の学習意欲が高まらないこと

(2) 課題の解決を図るための科目構成の見直し

長年にわたって指摘されている課題の解決を図るため、高等学校における教科・科目選択の幅の広さを生かし、育成を目指す資質・能力を明確にして教育課程を編成することが重要であり、次期学習指導要領では、次のように、科目構成の見直しを図っている。

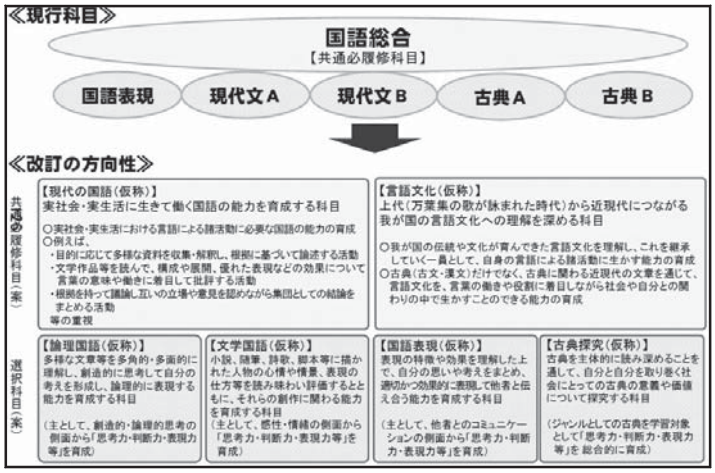
共通必履修科目（全ての高校生が履修する科目）

- ○ 「現代の国語（仮称）」：実社会・実生活における言語による諸活動に必要な能力を育成する科目
- ○ 「言 語 文 化（仮称）」：我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し、これを継承していく一員として、自身の言語による諸活動に生かす能力を育成する科目

選択科目は、共通必履修科目において育成された能力を基盤として、「思考力・判断力・表現力等」の言葉の働きを捉える三つの側面（「創造的・論理的思考」、「感性・情緒」、「他者とのコミュニケーション」）のそれぞれを主として育成する科目として、「論理国語（仮称）」、「文学国語（仮称）」、「国語表現（仮称）」を設定する。

また、「言語文化（仮称）」で育成された資質・能力のうち「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため、ジャンルとしての古典を学習対象とする「古典探究（仮称）」を設定する。

なお、必履修科目である「現代の国語（仮称）」及び「言語文化（仮称）」において育成された能力は、特定の選択科目ではなく全ての選択科目につながる能力として育成されることに留意する必要がある。また、「古典探究（仮称）」以外の選択科目においても、高等学校で学ぶ国語の科目として、探究的な学びの要素を含むものとする。



高等学校国語科の改訂の方向性（文部科学省）

言語の役割と、言語能力を構成する資質・能力

言語は、文化審議会答申（平成16年２月３日）「これからの時代に求められる国語力について」が国語力について指摘するように、「知的活動」、「感性・情緒」、「コミュニケーション能力」の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成に関わるとともに、文化の継承や創造に大きく寄与するものである。

また、中教審教育課程部会「言語能力の向上に関する特別チーム」においては、言語能力を構成する資質・能力のうち、特に「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を整理するに当たり、「創造的・論理的思考の側面」、「感性・情緒の側面」、「他者とのコミュニケーションの側面」の三つの側面から捉えており、これらの考え方は、「審議のまとめ」で示された共通の履修科目「現代の国語（仮称）」及び選択科目「論理国語（仮称）」、「文学国語（仮称）」、「国語表現（仮称）」において、言葉の働きを捉える三つの側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成するという考え方に通じている。